

マスク越しの会話／画面越しの会話

～コロナ禍における大学生の友人関係～

石井久雄

1. はじめに

(1) 研究の目的

コロナ禍で、大学生の日常生活は大きな変化を余儀なくされた。2020年-2021年にかけて、緊急事態宣言が幾度となく出され、不要不急の外出自粛が要請された。大学生は、旅行はもちろんのこと、飲み会や外食も難しくなった。また、大学の授業はオンライン授業が多くなり、大学のキャンパスに来る機会は少なくなった。そうしたなかで、大学生は友人と対面で会う機会が少なくなり、かわりに友人とオンラインで会う機会が多くなった。マスク越しの会話が減少し、画面越しの会話が増加するなかで、大学生は友人とどのような関係を取り結んでいるのであろうか。コロナ禍における大学生の友人関係の実態を解明することを本研究の目的とする。なお、コロナ禍で様々な制約があるなか、大規模質問紙調査を行うことはできなかったため、本研究は予備的考察とする。

(2) 調査の概要

コロナ禍における大学生の友人関係の実態を探るために、質問紙調査を行った。調査の概要は、以下の通りである。

○対象 首都圏の私立大学に通う大学生

マスク越しの会話／画面越しの会話

○人数 13名 (3年生：7名, 4年生：6名)

(男子：10名, 女子：3名)

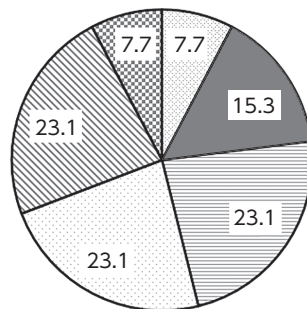
○方法 質問紙調査 (Web上で配付・回収を行った)

○期間 2021年9月下旬

なお、調査対象者に対して、個人が特定されないようにすること、調査結果を研究以外には使用しないことを説明し、了承を得た。

2. 対面での会話減少による影響

大学生は、人と対面で会うのは、どれくらい減ったのであろうか。「2019年秋頃までと比べて、2020年4月～2021年8月末は、人と対面で会うことはどれくらい減りましたか」の質問について、「何割くらい減った」かを数字で回答してもらった。図1をみると、「5割くらい減った」と回答した割合は23.1% (3名), 「7割」が23.1% (3名), 「8割」が23.1% (3名), 「9割」が7.7% (1名)となっている。5割以上減ったと回答する者が合計で77.0%と、8割近くにのぼっている。多くの大学生が、人と対面で会うことが大幅に減ったと感じて



□3割 ■4割 ▨5割 □7割 ▩8割 ▩9割

図1 対面減った割合 (N=13) (%)

いる。

なお、「友人と対面で会うことが減った影響について、教えてください」の質問に対して、「悪い影響について」、「良い影響について」、「その他」の3つに分けて、自由記述で回答してもらった。以下はその回答結果を分析したものである。

(1) 時間とお金の増加

コロナ禍によって、大学生たちは、時間とお金に余裕ができるようになった。それは、以下の回答から伺うことができる。

まず、時間に関してである。「時間を以前に比べて確保することが出来るようになったので、挑戦したい事に時間を使える」(3年)。「友人と会う時間を自分の時間に費やすことができた」(4年)。「移動時間がなくなった分、他のことに時間を割けるようになった」(4年)。「友人との飲み会や遊ぶ機会が減ったこと自体は悲しかったし、辛い思いもしたが、その時間を就活や教育実習の準備に充てたことで、結果的には、どちらも上手くいくことにつながったと感じる」(4年)。

次に、お金に関してである。「交際費による支出が減った」(4年)。「友人などとの交際費(交通費、飲食代など)がかからないという点ではメリットだと思う」(4年)。「外出が以前に比べて減ったので、貯蓄が増加する傾向にある」(3年)。

以上のように、コロナ禍によって、大学生たちは、時間ができ、出費が減るようになったといえる⁽¹⁾。

(2) 生活リズムの変化

生活リズムの変化についてみてみることにする。第1に、「電話が増えること」である。それは、次のような回答から伺える。「対面で会うことがないの

で、電話をしたがる人が増え、生活リズムが乱されていると感じる」(3年)。第2に、「夜が長くなること」である。それは、次のような回答から伺える。「夜にコミュニケーションを取ることが増え、だらだらと深夜まで話す機会が増えた。(電話などの)表情を見ることができないツールでは相手の意思をくみ取ること難しく、やめるタイミングが難しい」(4年)。

対面で会うときは、終電や門限を理由にして、友人と別れることができる。しかし、コロナ禍で時間に余裕ができることで、大学生は、電話での会話が増えるとともに、深夜まで友だちと電話で話すようになり、生活のリズムが乱されているようである。

(3) 感情の変化

次に、感情の変化である。

第1に、「孤独、寂しさ」である。以下のような回答があった。「孤独を感じるようになる」(3年)。「講義などはオンラインでもできるが、授業前後の友人との会話をするのがなくなったので孤独感を感じることは多々あった」(4年)。「友だちと遊ぶ、対面授業での友だちとの関わり、部活が全てなくなり、すごく寂しかった」(4年)。

第2に、「不安」である。以下のような回答があった。「時間を作ることが出来る中で、皆が何をしているのかなどの不安がでてきてしまう」(3年)。「友人とのコミュニケーションがとても減った。それによって、友人との近況報告を行わなくなった。就活の時期でもあったため、他の人の状況を知る機会が少なく、不安は大きかった」(4年)。

第3に、「友人のことが気になること」である。以下のような回答があった。「友人が何をしているか気になって仕方ないこと」(3年)。「対面で会うことが少なくなったことで、やたら他人のことが気になり、インスタグラム、LINEにアクセスしがちになる」(3年)。

このように、友人と対面で会うことが減ることで、何気ない会話がなくなり、孤独や不安を感じたり、友人のことが気になったりすることが明らかになった⁽²⁾。

(4) 人間関係の変化

次に、人間関係の変化である。

第1に、「狭い人間関係」である。次のような回答があった。「大学に通っていると自然に増えていった人間関係の輪が、もともと仲が良かった人同士で狭く深くの傾向になっていくと感じました」(3年)。「本当に必要であったり連絡を取り合っていたりする友人とのみ会うような状況で、以前よりも狭い人間関係になっている」(4年)。「仲の良い会いたい友人とは会うが、会えば話す、それなりに仲が良いくらいの人とは会う機会がだいぶ減った」(4年)。「対面での関わりが減り、オンライン上でのコミュニケーションが増えたことにより、本当に仲の良い友人とは、対面で会うこともたまにあるが、オンライン上ではよりこまめに連絡を取り合うようになったと考える」(3年)。「本当に仲の良かった友人との関わりが継続されるなか、声をかける程度だった友人とは距離ができたので、本当に大事にするべき友人とそうでなかった友人の区別ができたのではないかと考える」(3年)。「本当に大切にしなければならぬ友達と、そうでない友達の区別ができたと思う」(3年)。

なお、この「狭い人間関係」の影響として、「価値観が偏ること」が挙げられる。次のような回答があった。「自分から意識的に『会おう』と思った人しか会わないことが多い為、自分の価値観が偏りがちになるリスクがあると感じる」(3年)。「煩わしいと思えるような人とのコミュニケーションの機会が減ったこと。これは悪い影響の裏返しでもあるが、自分とは正反対の価値観を持つような人と接する機会が圧倒的に減った」(3年)。

このように、大学生は、もともと仲が良かった友人との関係を深め、狭い人間関係の中で過ごしているといえる。また、それによって、価値観が偏りがち

になることが分かった。

第2に、「会う基準としての感染対策」である。次のような回答があった。「感染拡大が考えられるため、対面で会うための理由づけや会うためのハードルが上がった。対面で会うために考慮すべき感染対策などが万全でなくては、食事会だけでなく対面で会うことすらも気が引けるようになった」(3年)。「友人の選別をしまっている。ワクチンを打つまでは、SNSや人柄での自身の判断で、友人が普段どのような生活をしているのかによって、会うか会わないかを判断していた。両親と住んでいて、(コロナを)うつしたくない。かからないようにすごく気を遣ってきた」(4年)。

このように、感染対策がしっかりしている人とは対面で会うが、しっかりしていない人とは対面では会わないという考え方ももつ人がいることが明らかになった。

第3に、「会わない理由としてのコロナ」である。次のような回答があった。「もともと、仲の良い友達以外とは遊んだり食事をしたりしたくないので、コロナを理由に遊びを断ることができる」(3年)。「できれば会いたくないという人と会わずに済んでいること。コロナを理由に気が進まない誘いを断れること。例えば、飲み会などに誘われたとしても、『コロナが落ち着いたら行きましょう』というある種決まり文句ができたこと」(3年)。

このように、人と会いたくないという言い訳に「コロナ」を利用しているようである。

第4に、「対面を大事にすること」である。次のような回答があった。「対面での会話を重要視するようになった」(3年)。「友人と対面で会うことが少なくなった分、久々に会うと話が盛り上がる」(4年)。「人と話す機会が大幅に減ったので、逆に数少ない対面授業や部活、ばったりと友人と会った時などに沢山の話をしたり、1回1回の直接会う機会を大事にするようになった」(4年)。

このように、対面で会うことが少なくなることで、対面で会うことの大切さ

に気づいた大学生がいることが分かる。

(5) 世界の広がり

コロナ禍で、時間ができることにより、大学生は世界を広げていった。具体的には、対面授業を行っていただけでなかったバイトが、オンライン授業が多くなることによってできるようになり、そこから様々な出会いが生まれたことである。それは、以下の回答から伺える。「オンライン授業で時間ができ、新しくバイトを始めた。プールの監視員。バイト先の仲間が楽しい人たちで、満足している」(3年)。「大学でオンデマンド型の授業が多くなり、時間ができ、コロナ前ではできなかった警備員の仕事をし始めた(長時間働ける)。バイトの人との出会いが大きかった。工事現場の警備や夜間の交通整理の仕事。1回1回メンバーが違う。幅広い年齢層との出会い、いろいろな大学の学生との出会いがあった」(3年)。

このように、コロナ禍だからこそ、新たなバイトを始めることができ、そこから世界を広げることが分かった。

3. オンラインでの会話増加による影響

大学生は、オンラインで人と会う時、どのようなツールを利用しているのだろうか。「2020年4月～2021年8月末は、オンラインでは、どのように会うことが多いですか」の質問について、自由記述で回答してもらった(複数回答)。図2をみると、「LINE」と回答した割合は42.9%(9人)、「Zoom」と回答した割合は38.1%(8人)、「インスタグラム」と回答した割合は14.3%(3人)となっている。オンラインで友だちとあう際には、LINEやZoomを利用している学生が多いといえる。

なお、「友人とオンラインで会うことが増えた影響について、教えてください」

マスク越しの会話／画面越しの会話

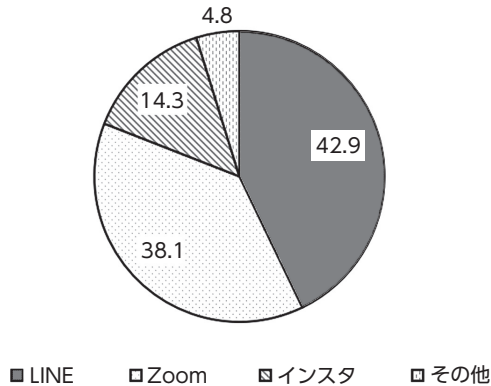


図2 オンラインで会うツール (N=13, 複数回答) (%)

い」の質問に対して、「悪い影響について」、「良い影響について」、「その他」の3つに分けて、自由記述で回答してもらった。以下はその回答結果を分析したものである。

(1) オンラインでのつながりの実際

オンラインでのつながりの実際について、みてみることにしよう。

第1に、「遠くの友人と会えること」である。以下のような回答があった。「インターネットが使える環境下であれば場所を選ばず、簡単に友人と会うことができる」(3年)。「遠くに住んでいる友人といつでも話をしたり、複数人で集まることができる。高校時代に仲良くて、その友人が関西の大学に行っていたりすると直接会うことは、なかなかできないが、オンライン上ならいつでも会うことができる」(4年)。「オンラインで友人と集まろうとすることで、あまり会えない友人(留学中や大学が離れている人など)と短時間でも集まることができた」(4年)。「離れた地元の友人とコミュニケーションを取ることが増えた。場所を問わないため日本中の友人と頻繁に連絡を取ることができてよい」(4年)。

このように、オンラインを利用して、遠くに住む友人と会っていることが分かった。

第2に、「オンラインでの話しやすさ」である。以下のような回答があった。「対面では話しにくい人とも話すことができる」(3年)。「(オンラインだと)内気な性格の人でも積極的に発言するようになる。オンライン授業では、対面では話しにくい人や、内気な人とも、話すことができるようになる」(3年)。「(オンラインでは)過度な緊張の必要がない。授業や会社のイベントなどで、知らない人とZoomで会う機会があっても、過度な緊張の必要がなくストレスになりにくい」(4年)。

このように、対面だと緊張したり、話しにくかったりすることもあるが、オンラインだと気安く話すことができることが分かる。

第3に、「不安定なコミュニケーション」である。以下のような回答があった。「時にタイムラグが生じ、コミュニケーションが噛み合わないこと」(3年)。「電波の状況が悪くて、会話が遅れる人がある。そのことで、会話がスムーズに行かなくなる。会話のテンポが悪くなる」(3年)。「オンラインだと、どうしても回線などの状態が安定しないことや、ラグが生じてしまい、円滑に話しにくい。また、人数が多ければ多いほどそれが起きやすい。全体的にコミュニケーションがとりにくいのがデメリットだと思う」(4年)。

このように、オンラインでは、回線が不安定になることがあり、コミュニケーションがスムーズにいかなくなることが分かった。

第4に、「相手の意図が分からないこと」である。以下のような回答があった。「表情が読みにくい」(4年)。「相手の考えていることを推測しにくい。そのせいで会話がかみ合わなくなることも多々ある」(3年)。「オンラインでの会話が増えたため、相手の話している意図などが読み取りにくく、会話に困ることが多くなった」(3年)。

このように、オンラインでは、相手の意図が分かりにくく、困る様子が垣間

見える。

第5に、「話が盛り上がらないこと」である。以下のような回答があった。「そもそも授業や友人との Zoom 飲みであっても、オンライン上で何人が集まると一人か二人の話を全員が聞くことになるので、話がいまいち盛り上がらなかったり、時間が無駄にかかるというデメリットも感じる」(4年)。「オンライン上で複数人が集まっても、その場で話せるのはせいぜい一人か二人なので、その他の人はただ聞くだけになったり、暇になったりして、全員が話そうとすると、結局時間がかかってしまう」(4年)。「複数人で一齐に話すと会話が被り聞こえないため、逆にコミュニケーションが取りづらい面がある」(4年)。「会話がオフラインと比べ難しいと予想します。複数人で会話をしている際に、入るのが難しい。間や相槌に難あり」(3年)。「相槌などが入れづらく、会話するうえで障がいがある」(3年)。「Zoom 飲み会では、一人の人が話し始めると、他の人としゃべれない。突っ込みとかボケとかができない。話が盛り上がらない」(3年)。

Zoom での飲み会等では、複数人で一齐に話すことができない、相槌を打ちづらい、ボケとツッコミができない等の問題があり、結果として、話がいまいち盛り上がらないようである。対面での飲み会等とは異なるコミュニケーション状況にあるといえる。

第6に、「オンラインゲームでの友人関係の深まり」である。それは、以下のような回答から伺える。「友達とオンラインゲームを行う機会が増加した」(3年)。「自粛期間に友人からゲームを勧められてから、対面以外にゲームなどで友人と遊ぶ機会が増えた。4人対4人で戦うゲーム(スプラトゥーン)。オンラインゲームを通しての友人との関わりは増えた」(4年)。

このように、対面であまり会えないなか、また時間に余裕が生まれるなかで、オンラインゲームを通して友人関係を深める大学生もいる。

4. おわりに

(1) 本研究のまとめ

本研究をまとめると、以下ようになる。

まず、対面での会話減少による影響に関してである。多くの大学生が、人と対面で会うことが大幅に減ったと感じている。また、時間とお金が増加したり、生活リズムが乱れたり、孤独や不安といった気持ちを抱いたり、狭い人間関係になりつつ対面で会うことの大切さに気づくといった人間関係の変化があったり、世界の広がりを経験したりしていること等が挙げられる。

次に、オンラインでの会話増加による影響に関してである。多くの大学生が、LINE や Zoom といったツールを利用して、人と会っている。また、遠くの友人と会ったり、オンラインだと話やすくなったり、コミュニケーションの不安定さを感じたり、相手の意図が分かりにくかったり、話が盛り上がらなくなったりしていること等が挙げられる。

(2) 大学生の友人関係のこれから

これから大学生の友人関係はどうなっていくのであろうか。コロナ禍が収まれば、大学生は対面で友だちと会うことが多くなるであろう。しかし、コロナ禍で培ったオンラインでのつながりは、これからも続いていく可能性がある。以下のような回答があった。「オンラインでの会話スキルが身についた（ゆっくり話す、相手の反応が遅くても辛抱強く待つ、全体的に消極的になる）」(4年)。オンラインでのコミュニケーション能力を高めた大学生は、オンラインでの円滑なコミュニケーションの仕方を生み出したり、新たな場の盛り上げ方を生み出したりしていくのかもしれない。あるいは、親しい友人とは対面で会い、それほど親しくな人とはオンラインで会うといった使い分けをしていくのかもしれない。

れない。コロナ禍は、日常生活を捉え直すとともに、友人関係を見つめ直す機会となった。「with コロナ時代」といわれるなか、今後とも大学生が取り結ぶ友人関係に関心を払っていく必要がある。

本研究では、調査対象者の人数が少なかった。今回の調査結果をもとに、大規模質問紙調査を行い、コロナ禍における大学生の友人関係の実態を十分に解明することを今後の課題とする。

《注》

- (1) 同様の傾向は、日本学生支援機構が行った調査でも指摘されている（朝日新聞 2021 年 10 月 1 日付け記事）。
- (2) 同様の傾向は、朝日新聞と河合塾が共同で行った調査でも指摘されている（朝日新聞 2021 年 9 月 27 日付け記事）。